

丹沢大山のブナ帯の森林再生対策について

(ブナ帯森林再生実証事業)

(1) 事業化の経緯

① 1970年代以降のブナ林衰退

1970年代から・・・大山モミ枯損に続き、丹沢主稜線部のブナが枯れ始める。

1970～1980年代・・・丹沢山、蛭ヶ岳、檜洞丸の山頂でまとまった枯れが発生。

1997年（前回総合調査時）・・・特に山頂の南斜面で衰退進む。オゾンの影響が指摘される。

② 丹沢大山保全計画の策定（H12）とブナ林衰退原因解明調査（H13～18）の実施

前回総合調査を受けて H12 に策定された丹沢大山保全計画では、「ブナ林や林床植生の保全」が、主要施策のうちの一つとなり、ブナ林衰退原因の調査が行われた。

その結果

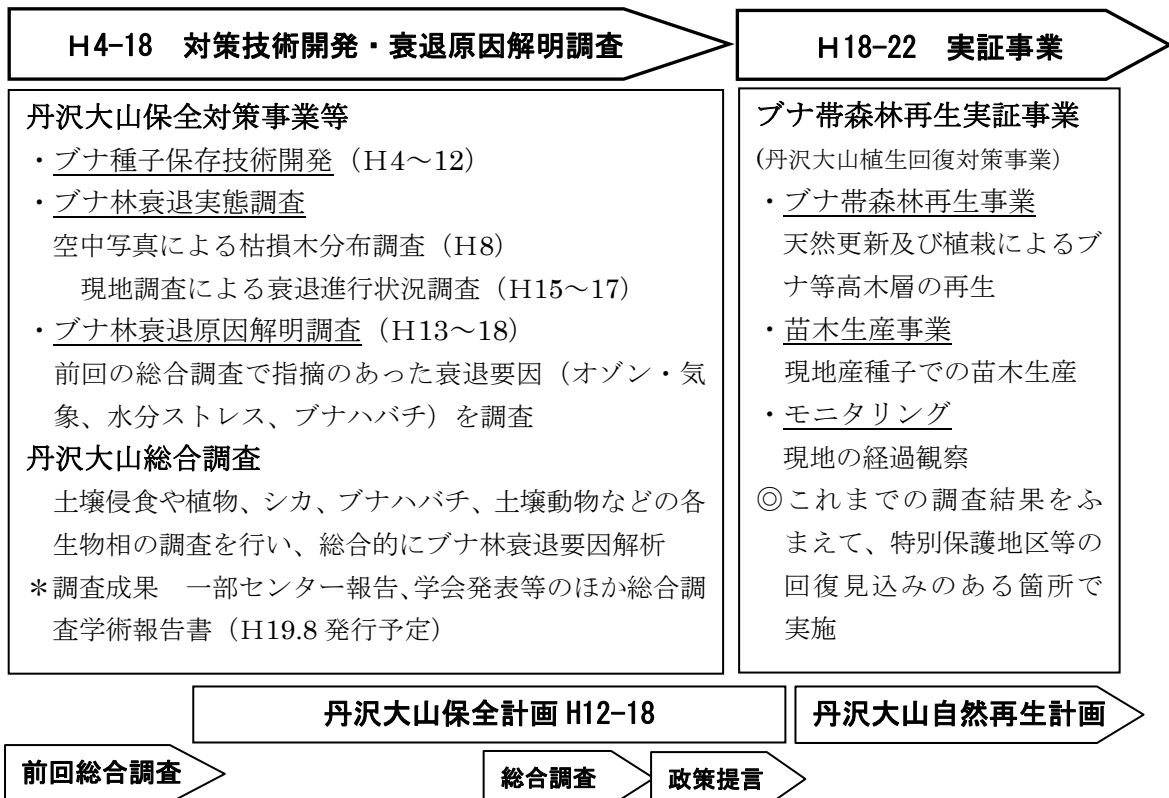
- ・原因は、オゾン等の大気汚染、ブナハバチ、水分ストレス等の生理的障害の複合影響である。
- ・実態解明は進んだが、自然環境の複雑さのため、今すぐ全てを完全に解明することは不可能。
- ・場所ごとに各要因の影響度を評価し、きめ細かく手法を選定すれば、対策も可能である。

③ 対策の検討と丹沢大山自然再生計画（H19～）での事業化

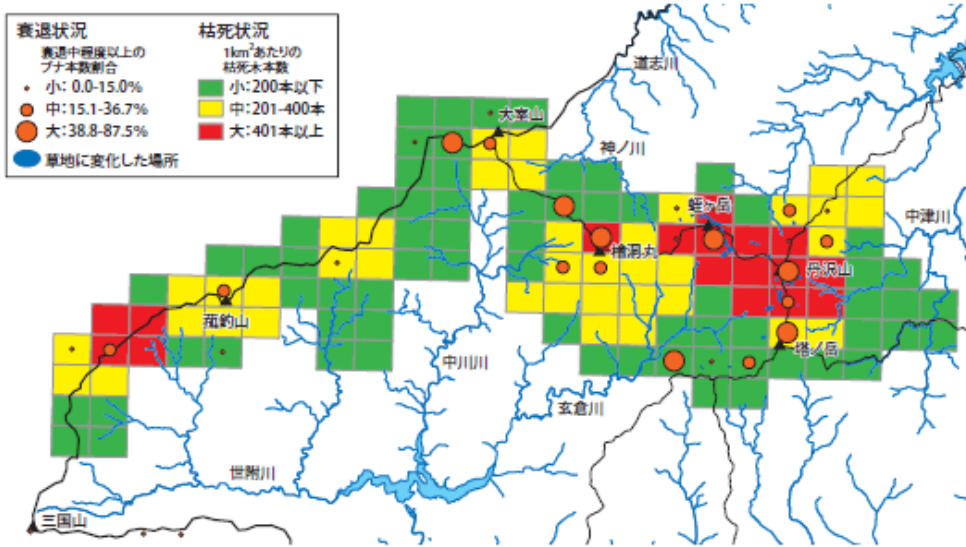
上記の研究成果を基に総合調査等で検討した結果、ブナ帯の森林再生対策として、

- 植生保護柵による天然更新を主とし、場所によっては植栽による手法の適用
- 国定公園特別保護地区内での人為による森林再生は前例がないことから、これまでの調査結果をふまえた順応的な事業推進

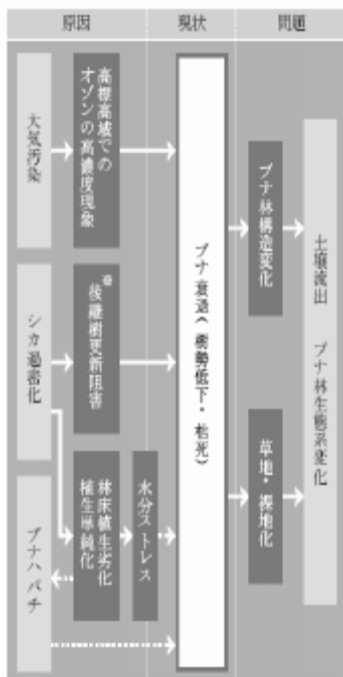
(2) 丹沢大山保全対策における取り組み内容



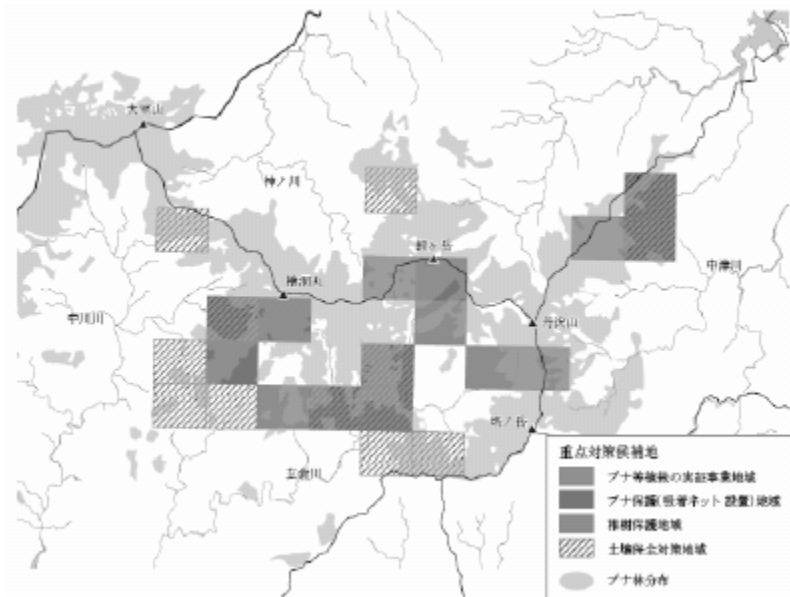
○衰退実態



現地衰退状況（丹沢山～塔ノ岳間）



○ブナ林衰退の要因連関



○ブナ林再生候補地マップ